紅塵集 下

特別
イ4
3163
25(2)

紅塵集類題 下

戀部

戀

いそかれあく爪れはやつるかるぬかしさまき人のえはん　契沖
立わかぬ塵のかりにまうてとも見てあくる庭おまくれねむ
人まやハ見つるさのむくへき役をとらめまゝてせてみき
とはしそとるぬ弁やいつられつくもはかぬやそと新ん
むなへきに役の世うよておりすは完る為すもつる花見られ
わきさへ子人のれくそて集めよらひすいつるさん完き花
あつ弾の出ほのよそかくるあるそくるつきぬ意もするられ
さかきしみ井ちれいそ縁つけるまよい神の御かけさ
あ之坂の宮社まさし花葉ち見て志られつく信打とれぬ牧ハ　長流

日本文庫

貴
14
3163
25(2)

恋

おもひこし光のほどはあけてこそいひこそやられて山の名だかき　ちかげ
夕ぐれのうらみはたゞし恋すてふ身になにあふてみるはひとはまた
人ごとにかよふ浦のなみのおもかげをかけてもえそらさむこそあらまし
かきくもる月のかげかくれておもひかへしてこひしき人をこひつゝ
わがこゝろまことに恋しとおもふらむ恋をすてなば恋しき身
しらさんとふたゝびくるかとおもひきやかさなる恋のうらみてよみ
けふまでいのちもいまはながらへてかたの袖にさへあらはれにけり
身ぞのこりてもいまもふたゝびかへらむとかへりみしよかなしやゆくらむ　なに
おもふことすてゝ恋ひわたるあやしのつらさぬれつゝそめてくれ
枕のみしるなる身はとけてあふせ恋わたるかなしきけふこのごろ
わがこひのなかばはかなきにあらずともかりそめのあひのこゝろ　民子

初恋

わすれじとちぎりしはあらたまの月は見にこそしたひゆけ　宣長
ちかひてし松のたちえにおとづれてもつれぬ恋すてふ
いその浦のなみやこゝろに千鳥なくかたもあらわにとゝめよ
ちかひてしいもの山あひのかげふかくもえもゆくとあらそふ　菅根
あはでこそあさきこゝろにしられじとおもふなみだはひとりかなしき　季鷹
おもひ初めしあひみぬ人をこひわたり　はつ年のくるゝまで恋わたるらむ　吉田某
おもひそめしことしのこの月ひとへにこひまさるらむ　枝直
つゝみかねてそらもなきかな袖のうちにこそ人の袖や
みちのおくにこひぢをわけて何とこゝろにこそおもふ　千蔭
恋しさもほのかにしのぶ袖のたもとにほのみえし人の恋ぞ
はかなくもまつとしもなきこゝろにかくれつゝ人をこひわたらん　成章

待恋

おもひそめて後あふともなくは恋しなんやすくしらでもありけむを　芙沖
とはくこそたのまれきらめ手枕の恋しきよはにまちわびてふる
こぬ人を待つ山の端にかたぶけば我もねられぬ夜半の月かな　千蔭
おひさきを思ひやりすて宵まつのくらきにひとりまちわびぬらん
たれかしも人まつよはの風をつらみ閨のまどのかきやりつゝとふ　枝直

憑枕待恋

いつわりの人とさだめて後まてしひとり寝ぬる夜のあかつきの床　芳雲

後朝恋

きのふめるよりかはるそのかほりかなしきにけさかへるへき　千年

初逢恋

うれしさとつゝむ袖にはほしあへずそのよりほかの涙とまらん　春海

逢恋

こよひこそあふもあふこゝちしてはかなくもちぎりてしむすびを　成章
うれしさやかはる心をかはらぬに一夜のちぎりはつゝまれて　宇万伎
うつしもきかぬ人のならひとてはあはれなるかの人のまことを　(名)

暮逢恋

あはれのおもひのつもりゆく夜さらにありの月をかはる　武子
たのしやらしの山手をゆくてまちかねてぬくぬくもかへらん
こがれつゝあふ夜うれしきかれあふてねるまであはぬかな　千年

隔恋

枕をとりて夜半のまくらをかへすとやそのもちつゝもとりて　春嵐

忍恋

待ちつる雲井のそらのみ思ひつゝやつれゆくとも人にもらすな　芙沖

久恋

あまたとしかさねし恨のはてもなくつれなき人をいかにせんとや　春海

恨恋

便りのみなるあきはてておもひそめし波をもしらでゆくのみや　武子
はつ折りるその心ならんうきをやるせなみにつらき恋する　在満
まつひとはわれをやわすれそめしその恋ならんいつ人しのびても　枝直
きつけのみひとのさきにきこえてのちぞ涙にもしらぬなく
それまでの恋をしてありあふたびあひてそれもあらぬ涙　芙沖

互忍恋　人知れぬおもひならまし今はたゝかゝる人にもしられましせし　春海

さらにのみ人も月日へてこかるゝよそにたはやすし　千蔭

忍涙恋　おもはしきつゝむ涙のくさも雨もさそはれて人のとふにもやせん　枝直

月夜にはまた袖にかひなさとあらしとや我人ならんまし

思恋　こひしともうしともいはゝえてわかぬ君とし思ひそめてあれ　年主

よの人のつねにする恋をあはれとも思はゝあはれつれなき人に

かくとしらせてこそあらぬ心のみ涙のつゆのおもひせなくに　契沖

山深のことはにもわすれてそみるかへらぬ思ひしらせはなりゆく　季鷹

思高恋　わか恋は雲のよそなるさしくもの心のうちくもりなく　幸剛

片思　はつかたゝまつひとりぬるとも月のかけやすあやしかたらはて　民子

おもふともおもひやはするつらきかはれ物のあはし　成美

新恋　ゆくすゑの神のいかにおもふらむなからは涙にかゝりけるかな　枝直

たのむにし神ならへぬかゝぬまのまことの身はたゝみつし枝にかゝる

あすまてと頼みかけてむなしきに今はかたなき袖のまの露　宣子

今はとて契りしことを人ませにもかゝるつれなきはかなさそ　千蔭

欲別恋　おほかたの別れのをりにもかはかりくるまてかはらぬ袖にあはれ　久老

あはれなるまさるなきとも思はなくにあやしくぬれかへるさの涙

惜名恋　身にはなそうねをあはれなるまくならぬか心のよしなし　契沖

さてもつらきこのおもひこのよにもわれてくれ秋に雲はかはらず　枝直

別恋　枕のかぜをはらふもおもはれ涙さらし我人の衣々くさ　千蔭

今はとて秋のなれゆく衣のまにてさうかゝるとてこそぬれ衣

後朝恋　おもはれぬものかたみのみちかさうなるもの衣のなさけありつらん　成美

ふくしもりてえてゝぬ春鳴きらてゝぬる枝ぬらの人乃わ枝 枝直

寄船時雨

おもひやれさそも宿のおきく人るあしへの屋乃袖のしぐれを 民子

寄船恨恋

わきてかへつゝしきるねを袖ほはなくしかのかもとは 季鷹

恨恋

あくね枝を中よつてそしかきれてすゝぬれもつらく 契沖

ましくへ人の心のゆく末の事のもあるや中のつらみ散らん 成章

うれてそおもひてもれ死ぬへきうらみを人をはれあるる 民

うらむへきふりもほし我ともつてあられるるや結ふんかせし 季鷹

恨絶恋

今よりはうらみん人かくるさはなんとゆりし 在待

契後恨恋

これそはうきうきまち待てつくるきはとしと人を思ひそかな 千蔭

つらきうき身をもまた今をはしおもひしる我ふんのみてうらみん

恨身恋

ゆきわぬ中のうさきもわれをしたの袖のいろそへしたへる 春海

待絶恋

くすりなく月すむよを風生なれや末きて中よおもひきゆるへん 千蔭

さるよう文あやもそれりかるよのこえぬ我をまの袖して 枝直

待不絶恋

あるかいきを出つくるちる人てたえぬ中ぬ井とはくらし 春鷹

今へはつもきすひ初とおつうよろ行もとぬる人の心をさけたる 成章

過不逢恋

いつもの如きを絶つもるそるもありや又いおけとおもひし許 枝直

こらみらいおそつれきまおもてゆしゆきぬあふ坂の世紀 千蔭

まあ名ちぬれあふおきぬくをやまのかくそてしらぬ 在禮

たちもひのゆせし我を人こよう子名のみるるあるぬけは 枝成

あく嫁の屋まうつそきかくし見あるぬおもひ世をやつくさん 春鷹

まれそたえぬ猶もかくみの老まむせそつるそうれ 季鷹

いははきてうるをなくは中そふあるぬ月はもかくそうらし 民子

題恋

うき名は今や恋の[illegible]　成章

ちかひし[illegible]　在酒

契[illegible]　氏子

ま[illegible]　[illegible]

名立恋

[illegible]　[illegible]

[illegible]　契沖

絶恋

恋[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　春満

[illegible]　氏子

切恋

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

人に知るる恋

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

色に出る恋

[illegible]　千蔭

[illegible]恋

[illegible]　[illegible]

[illegible]恋

[illegible]　春海

[illegible]恋

[illegible]　春満

[illegible]恋

[illegible]　千蔭

契恋

あ[illegible]　[illegible]

忘恋

[illegible]　契沖

隔恋　へたてある人の心のうさやたえぬ涙の雨となるらむ　千蔭

満国恋　やとはるゝ人つてならぬ玉のをの絶なはたえねへたてあるとも　枝直

帰雁恋　やさしくもありしにはまよひてもあらむ心の残るをみたにしらぬそらにま　春道

初恋　むかしの秋ハ忍ひつゝの中をわすれぬもせしむすひし井上の水のあふなき　定済

妹とせし名をふらひそらしもあかつきまとのかたみは葉のいかなる日にも　久老

老恋　つれなさはさもいひてよそにも老ぬれと思ふもはてしやなからまし　盛章

舊恋　今ハとて人の心のふるきをもわすれぬそれハかなしき世の中　枝直

かくしてもしれしかハ思ひてしもあやしくあふさとく今ハなくさむ　吉隣

なかなかにとはれぬ世をかこつやるやへたつへからし思ひしのはれぬ　春海

恋人多年　春日の山をゆくてもあふ人ハてらしあやしき恋の玉の緒絶えなむ　常雄

閑居恋　わくらはにあふことなきにまかせれは身のあまりなきはかなしや思ひしかな人　千蔭

水郷恋　めくりあふ事そかたき難波江のはしかきつゝ心をよせてみて　春海

海辺恋　いひなし事ハ波よりもあらき磯の岸のほとに立てこそ　枝直

旅恋　東路をゆくさきもわからぬ人をせんなくこの人々まさ郎なかなかうらみて　盛章

春恋　ゆくへしらぬわかれをすまの浦の心のうつりとてうらうらにしもゆる　定済

春されはかとことにつれなからまるる人もなきにまさらぬ人の心そまはしかる　千蔭

夏恋　大かたのおもひなりとせは故郷ものへいへり家よせたや　久老

夏秋恋　年ふれと忍ふゆきものへともつゆのつけやおもひの人そそみすてしのはれ　久老

秋恋　あまのかる藻のおもひのたちゆくてしるへの心のうちにもこゝろにあかしの　吉隣

秋冬恋　おもひそめしを人の心のいつはりを秋の袖そ枝にさしてある　枝直

冬恋　恋そめしかたのきえてこゝろのうちの時雨のうきにまさりなくてしよ　民子

たちもなとむかしのうき人の袖にたまるまてあはぬそられ　久老

寄日恋　人をおもふ心ハつねにみだれてもはれぬ思ひの身をなげくかな　真庵

寄月恋　ちぎりおきし人ハつれなき月影のたのむかたなきよをやなげく
あやなくもこよひのはてやてる月のかげにぞ[illegible]　入節

寄雲恋　山たちのそらにたなびく白雲のやへにかくれてあはぬなるらん　斐沛
あふことのかたきをみてもおもひあへずこひやわたらん[illegible]　枝直

寄雨恋　かぎりあるよにふる雨のしたにのみ人にしられぬ涙まじりて
まつらはいつはりとこそいへど今はたのむよの涙ん　光風

寄霜恋　こゝろへだてこそなきわがおもひの霜おく[illegible]の　吉岡

寄霧恋　うらむこともさはの川霧たちかへりこひしき人をわするゝ[illegible]　宣長

寄夕恋　くるゝよかはるよもなきいのちかなあはれのゆふべいかにせん　氏子

寄山恋　いはでのみおもふ山の峯ならぬ[illegible]こひしきよそにこえぬらん　宣長

寄関恋　恋のおもひせきもとめなん人を見る身をのみなげくや　斐沛

寄関恋　人めのみしのぶ心もせきとめてみをこそなげけ[illegible]　春海

寄瀧恋　おもひ出てもなほたきつせのよるもなきわが袖のなみだ　吉岡

寄川恋　いかにせん川のよせくるなみもわれもてなす袖かくらん　千蔭

寄海恋　わすれじよあさきもあらじわすれ川[illegible]のなかにしもせん　光子

寄海恋　せきとめてみのあまりしほやくけふりもせてこそ[illegible]　枝直

寄浦恋　たのめつゝ人をうらみのあかしの浦のなみのうきまくらかな　[illegible]

寄舟恋　あふことはさはりて今日のあふ舟のほにあげて風をまたなし　[illegible]

寄橋恋　橋わたしなきみちのかよひぢはいかにわたらん[illegible]　氏子

寄[illegible]恋　山の人のほりかはの[illegible]すゑならん[illegible]　千蔭

寄江恋　つれもなき人をうらみてひとりねの[illegible]

寄木恋　あふことはなきなのりて年をへて一本のまつひとりこそ　季鷹

松されとあつえもたわまなき梯のまつ恋はやまし年へぬとし　宣長

つれなさや松の下川てやゝとなのゆれはかきぬまつひあまする　氏子

寄草恋　うき人のいまはなけきのわすれ草わすれても我はすてすくる　枝直

こゝろなくかれゆくにはるかすむうちにしのふ風の人の心も　宣光

こゝろなく我をかけるか月草のあさかほのあはれなる人の心と

寄萩恋　ゑれあさ萩の下風のさやくまに人そとふ宿の花にかれよ　枝直

寄女郎花恋　秋されはやまの下原の女郎花人にをらるゝ時さへけるも　

寄花恋　春されはさく咲梅の花もなにふさはしてみえなる君のこころの　宣光

秋の野に咲ひられは萩の花につまこふれ妹をこそ思ふ

寄梅恋　咲白きにほふにもかをりはまたやまのさくに見えてきえへく　猿丸

寄蛍恋　春されは花まつかつるむつまなかきそて君か絶えまをそ　常蔭

わすれなるつひにかへるそ河の東かくる水をとこししとなるまてゆき　

寄笛恋　仙山のつまほにおふるはるまの吉に恋ふるくもひとかたつれなれ　枝直

寄鹿恋　ふきかるをあの山にあれはなしひとつかくなみたにそこをとて　宣光

寄猿恋　うきくされまうき今宵を今そうつの山の朝もしらすゆかれ　猿丸

寄獣恋　まつよはくきれにけにやまに鳴むし犬の声をもをさへつかれ　久成

寄鳥恋　うきかへのとこうつかひまゝをかれ駒なくとよりまだにかく　枝直

うき世の恋ふるひより人のかけれとは浮世のをしてき今のゆや　

あさ河のはなのつらかさきてきまたもかつむうひとにするかれ　長勝

うつ国のあつてきもつ山ものまもしまたつにもをのすて鳥　久光

寄虫恋　浮世のあきれあかまうまつる人なは屋に行かしの声に秋われつ　季鷹

から人の母のかたみにあらなくて恋てこゑにいかばかり　政子

寄旅恋　旅のそらうきに独寝して岩がねのまくらに淋しき人のまくら　常膳

寄田恋　なのみ引ても山田のさなへこそひとつにまかせぬ人のまことに　枝直

寄車恋　恋しさをのせてもあまる車の力のよはきかこつ身　契沖

寄玉恋　はなしてよ人をもまたぬ小車の行へとひとつはかなき人かな　千蔭

寄弓恋　いつはりもありてかひなき手にまかれたるはかなき身かな　枝直

寄篠恋　ひきかへし夕の人も今ぞおもふ我恋しさに堪へ　杖成

寄笛恋　さのみやはよりけてかへしぞ恋られぬ君を恋ひなばと知るとも　宣長

寄扇恋　笛竹のよのふしをかなしとてねぬる人のあはれなるらん　枝直

寄樵恋　秋風のなくさむかたにしてあふさへ身にこえてたのまる　常膳

みなかみもうかるる人をとこなひしてかは　杖成

寄糸恋　いとせめてあふ夜はかりも結ばれぬ恋にまかせて人をまつ身は　政子

寄帯恋　さのみやはうきなかばにかはるらん人をもかくしむすぶ帯　千蔭

寄衣恋　つれなさと我のみつかはせて衣に人をかつこひわたる　枝直

寄夢恋　たのめつつあふと見し夜の夢さへにかへらぬ人にかへりけり　常膳

寄枕恋　よるとしもねられぬ恋も枕やはあはれとしらぬなみだのみ　契沖

みるめのみなくちのうき名もあらはれぬなみだかな　杖成

思ふ身をしらずやうき人のなさけとふよにこえて　政子

寄涙氏衣恋　わかれてもなほなげきのよはにあふ人をまつのみの月

にいはなふりかへる人の袖ぞ身をしのびあひなば　千蔭

寄鹿恋　かくれてもなほあひみむとおもふ身に秋の夜をまちねば　春郷

無題

山川の春に桜の花ゝて思ひかけて八橋とかいふや　杜風

ひとりね

天の原ふりさけみれば春のよにねぬ人のひとりむかふ　高堂

やまとそへてそやまれそ見つゝ恋ひ渡りつゝいつをいつとてかなしき　子信

おもかけに見ゆる恋ひの身のひとり夜をいつまでかねしや　氏子

寄恋人

こよひそのひとつまくらに人はなきとこそさりけりや　春海

へはしらしら佐細江のみをつくし身をつくしてもかひやあらん　千峯

恋人

逢見ての後の心にくらふれは昔はものをおもはさりけり　宣長

さらにそのそて涙にあるゝ今宵こそ八日はかよひもあるそかし　吉岡

かゝるみの我ひとの人やおもふらんなきそてかなしきのみ

ほのかにて見ゆる

相見し人のむすふ契そむきはてしよにふかく秋て袖にかゝる風のふくにてあはれん

ほのかにかひなき身を衣にひとりねる人の思ひするはなる　枝里

うちとけて見ゆる

たのめしかとなき恋のしのふる袖ひとつ袖もぬれたり　義子

あひおもふ

としふれとしらすて身のわくかたもなくなきて見る夜に　よの子

とふともなき夜をいひし君こそ思ひはかりて

かのふへき身のほとある人は思ふ文ても見てみれは君は知らし　三つ子

おとろかぬを思ひしほとにおもふ哀はなるものと思ふことそすくるよ　吉岡

ゆくへに帳ふかくそおもはれた恋ひわたる人ゆゑに身をすつるひとり　春海

あはれとも見し事をわれしゆるさむ人をみかはしてたゝあへぬなかそ恋するにも　为村

ところせに涙のひまもつらくとおもふは袖にぬれましあへいやさしかる　素全

あひし夜は

恋ひわたる人のさやけきに思ひ川にさかひてふかき恋ひにそうらみん　季隆

むかしの思ひおもひこそ心にもつゝみてあれはうきこころうつあやなくさ

まさにはるかなるいかにかく人風の流れてあるおもひそね寄の我ぬふき　千信

あひ難恋　いつやらあひみぬ世の中ハかけて[illegible]をやまゆ[illegible]　志つ子

[illegible]　なの今も[illegible]人[illegible]めて[illegible]　氏子

としてあへる　[illegible]せみいあくれ[illegible]人をとめて[illegible]　千之

としめて忍ぶ　むすこはなかつてあり[illegible]ひとの[illegible]　枝豆

うらむ恋　せき[illegible]しお[illegible]にかくあへ[illegible]のみ[illegible]　季唇

人をたのむ　おもひなるかなる[illegible]をたのむ[illegible]せすくとこし　志つ子

[illegible]　いつしれまちつき[illegible]みあふ[illegible]月[illegible]　宜也

まちてむかふ　[illegible]よもの[illegible]後にまちえ[illegible]ひとの[illegible]　志朗

[illegible]　なかくみたのあさ[illegible]せハ[illegible]人にあふ[illegible]のは　多すい

きくれ　こともやこと[illegible]てあてしきつきと[illegible]らしむつ[illegible]　志つ子

不[illegible]みこ寺　[illegible]かさみひかれさかるを門[illegible]そてあこかれ[illegible]河の[illegible]　千蔭

君ひとり　君ハまたことさらなかんとの[illegible]月ハ入る[illegible]　杖國

[illegible]ひ　妹まらひ[illegible]のきねをうちて[illegible]つまあし[illegible]　宜也

[illegible]うけ　うちらんつなくさ[illegible]月もの[illegible]をひ[illegible]　千蔭

一夜[illegible]　なかね[illegible]一夜計のよ[illegible]ゆくにきゆ[illegible]　志つ子

一夜[illegible]いへをたかすしきおり[illegible]の数を[illegible]　杖成

二夜[illegible]　[illegible]ハ一夜[illegible]のさ[illegible]ふかよ[illegible]の[illegible]　春海

[illegible]　こよ[illegible]でひとの細布も[illegible]ありてこらしひ[illegible]　千之

難波[illegible]あしれ一夜ハ[illegible]かくやかりしと[illegible]　志つ子

[illegible]　[illegible]みらかやか[illegible]二夜こぬ[illegible]　千之

三夜[illegible]　あさ[illegible]て[illegible]月の眉[illegible]をまつ[illegible]　杖國

[illegible]つらつ　今[illegible]久し[illegible]て秋をおも[illegible]まか[illegible]

ほとゝきす
松よりく風の夜もたえぬらんまくになりそけてけん　季経

松にすむ
おもふらんはなのしつむ猿引てあく夜あかぬよんろしうや　杖風

夢にみつ
人もかくおもひそいつやおもひおきてなくむしもなきよかりかなそしらん　よしや

よひのまに
暁の月つくさまよかへていれまくはねよるの子ひかさらなかきをかな　宣也

わすれな
妹かなかのかさらのわか人ありそわすれそぬ別かなしき人　志則

恋そめて
わかれかく
今ハいて袖のぬるしなうらみ今よおもへてわすれきりゝの志るべある　まつよ

枝のあさ
ねやの枝ハ暮をまつて夜のねぬてわすれさめるそて夕ぐれハとそるる　千の

久の月くて袖ハひらめる月よハあふまちまるにきらハさらくしを　季應

恋の袖をかくるねのころおもて枕をそるけさの面影
つれなくとかなと戸をたちしわすれするおもの月ふつらの恋ん　宣光

ほうひ
いきの夜よ月ハおもへてやきりの子のおもるねハまたのひまらす

あさ人
いせしまや鐘の音けふかよせてまくまきのよはさ　志季

人はて
あさての夜ころあかされハあつら人てわかの夜のうとかなは　よし

わすれ
まち侘て月ならねてわかこの恋ハおもふまゝしいそのやまくら人　季経

わすれて
恋なよかすて衣暮ふてきつまのいくしとかし月

まつ人
なよハうしみのゝかハれ恋ひ人をおもひ月をおもひけきや　恋門

人まね
川の辺もりの日をもつまきうしやなくらねきかぬ風の恋

人はる
あかひつ雲ハあやなきわくてまたぬ人をいかなよら月へ　恋ち

恋ら
よひくよ夜ハゆめきりもあるはてからの月よ人をなほ

恋をは
山嵐の山きくて恋あいかくせても花ハ恋よてきしゆくれよは恋　宣光

やさてもすいつらよかへつるまてら恋あら恋てさあら人

こいのをハまてよみせて月まけくされなる夜よ人て恋すら　杖風

花のうたを かゝらはあひ見むこともなき花の枝かくろゐ姿をつゝまし 千藻

うけくとも[illegible]の[illegible]て今は[illegible]あらむと 杜國

五月雨に あまやとり[illegible]人の[illegible]て[illegible]むとて[illegible] 宜竹

あしやすく 見よこひ[illegible]見あらは[illegible]数[illegible] 千年

かきつはた あら風も[illegible]見る[illegible]ふく[illegible]

水 [illegible]風のふくかた[illegible] 杜國

夏祓 さらぬ[illegible]のむかしを誠[illegible]木川[illegible]なきし川原

[illegible] [illegible]あかれあさくかけ[illegible]ひるかへりて[illegible] 千年

うつむ 見の[illegible]桜井[illegible]流ての[illegible]ける[illegible]

あきもすむ[illegible]つ[illegible]井の[illegible] 友經

かきつはた [illegible]人の心[illegible]身の[illegible]ん 惣中

隙ある 人こゝろうきの浦松[illegible]しく[illegible]浪[illegible]

[illegible]の[illegible]かるゝあやふさに[illegible]あき[illegible] 杜國

わすれ草 今[illegible]もた[illegible]ぬ[illegible]の[illegible] 民子

かきつはた あら[illegible]ひまむせ[illegible]數々を 子[illegible]

逢恋 [illegible]流の[illegible]杖ま[illegible]むつみ 杜城

[illegible]あらぬ人まあひて後つはし名[illegible]

[illegible]まえると[illegible]見[illegible] 春[illegible]

人の[illegible]なる[illegible] 一[illegible]あしかの[illegible]君を[illegible]ん

花ま[illegible]のさ[illegible]あるよ [illegible]のさやなし[illegible]つ桜の[illegible]あ[illegible] 季[illegible]

あだ人は偽りをいひし男花のはかなくなれるを
さりとて又あだなる心をやりて末なきふ風情し　一字庵
移ろふ男心を見たる女の気には来ぬ人かな
浅茅の露にぬれつゝひとりふしても寝られぬや人のうらみ
女のさとりに顔をかくすれ
いはれぬおやの顔に魂もなきんたゞ忍ぶこゝろよ
人のなさけ思ふ身の底は社につゝみてもやるかたなきはかなく
なまじあはれなること
なき人は来ぬ人の底を社につゝみてもあかしもせで憂き身かな
美枝
又春の夜の底のあかしけりそのまゝ人はきえてやまず
我さへ夜の夢ならでつきせぬはなれぬ人は憂きしかな
まさ
玉川の水の色とはちらされとつまくかなしみのかゝるもこそあらまし
まくあ露すかへし
かくされん路のゆめし繁きまくかなしむ身の井戸の山吹
きみやうらみんと思ひ捨てられて行きて嵐
越えぬ身の跡に行く枝雪消えつまれにさえてうらみ
枝李
春のくれよ人をおもふ
今さらとちらしまた残りにまつ人の名をのこして春の名の色　去剛
歎しらん
よ染めたる庭の花はかなくひとすぢに地をはなれぬず　契酒
まよひてはわするゝみをてうらみなかりせをつきんまなん
わすれゆく人のかんたの浅茅原ならんやうれぬ身の面影　光汲

雑部

天

はてしなき[illegible]天[illegible]大君と[illegible]　東[illegible]

入て[illegible]天の戸[illegible]世の[illegible]のはじめ[illegible]

日

[illegible]日の大[illegible]　春郷

[illegible]　秋成

朝日圓如鏡

[illegible]の木の[illegible]　枝直

星

天つ風[illegible]　長流

世の人[illegible]　[illegible]

西山[illegible]の[illegible]　千蔭

雲

[illegible]　[illegible]

[illegible]人の[illegible]　秋成

暁雲

あかつきの横雲わかれ行月を待てたなびく　枝直

嶺上雲

立わたる雲の峯かくよそに八重山の花の白浪　千蔭

流水漫雲根

うつさぬ水にうつりて岩ねにかゝる雲の音あらふらむ　春庵

雨

春雨のふりてうきよそにけふもあめのふる日ゆく(?)のそら　春海

こよひ雨ふらずは入りにし人もあはましものをさびしきか　杖成

夕雨

ゆふぐれの松にゆふべの雨のふりもこそ　民子

風

あふひのかぜもさわがず都のそらの風さへ吹ておほかた　杖岡

嵐

峯の松の嵐をさそひてあはれ秋の夕かな　吉岡

暁

住なれし宿の雨の音ぞわすれがたきかな　成章

おのづからねざめの暁をおもひしめゝ身のすゑ　春海

むかしおもふねざめのまくらの世をしらぬ時の雲

暁又鶏

まつ鶏にもなかぬさきつげて見み　千蔭

朝

むらくもの朝なぎのしのゝめに人のみなみ　春海

昼

あかさらん日かげのくるゝにほひのさくらばな

夕

けふもまたくれぬる一日のくれやすきかね

此中にゆふあかねさして入日は山の端に　忠琢

夕陽映嶋

夕陽に白いてゆくゆふ日さしぬれは　千蔭

夜

ねざめして袖の露にもやどる月影　春海

山

下野や那須の篠原ゆふぐれにたれをかも　吉岡

花をとめて散るを見るにもあはれ春秋もなし　在満

下野や二荒の山のをちかたに荒く雲のかゝる　美樹

山しろはうしろの山をみるごとに大井枝のやま　成章

名所山

あらたなる神の山路をこえてしも猿なくの月ハさやけかるへき　千之信
万代の國乃緒あれはつのねをあふけハきよき陰　その作　杖成
伊勢かつらきのふもとの都らん花ひらきてもみとりなる松　幸酒
筑波しけき筑波の山風清しと見えて見えつゝ月代の色を　枝玄
ふしの月ハ山の名にそ高けれくもる事なかれさらぬ峯には　契沖
雲の上人の命をそへてみれとかつらの月そ高くたかさ
ふしの月は浮世の雲を払ふて高く見えつゝ月ハ清まさる　呂嵐
年ぬれねとそてにおほうねやまのさくら花みれハ春ぞ花
天河に流るゝハさらに見つゝもおやせ峰の雲の上山
すそのゝ秋の月なみの花ちるまつの花かつらさえ　吉爾
猪名の山の月かけをみて行くをハあかぬ山の月の光かな

そも〳〵や陰はさしたる山門ふかくて雲ゐにかくる月の影かな　巻波
春きぬれやまとの國の緒ちかきもなを山をみてふるかなし　季唐
たかく入ぬ山しなみれをふしのねハ大空にそよそて見る　民子
天の原てるはまちかし今のふしの雪も神代のまゝにおほえて　枝玄

そらし嶺のふしたかさは

ふしの雪を雲をあかぬそ見しも松風さして月の影　誉跌
神代よりあらそひ来る年なし山わけの路のつまになけれ　土波
あらはれのそら晴れあさみきりなかりて雲霞をさしそめて　吉洞
岩の上に月かけさらす千代の大空や月のきはまりしらむ　美桜
杖をつき山も霞わたりかつらの花をみて雲なかれつゝ　魚蔵
はるゝれハ雲よりもゆけはれ横山の白さにふかき雪

冬されは河ぞひつゞきはてもなき子日の山はつらなれるとも　長閑
庭は只みどりばかりそ水のあかれ山のしたゆく路のやまかけ
旅人の袖ひるまもなきさくら狩なくさむ中山をゆきゆきて　枝直
年ふれと草の錦も色はなよふりつゞく中に心こそ来るとさ　民子
うつしゑとなる山の影見あけやさしきまつの白雪　白山　契沖
松の月はなれしぬ山の枯木きえてこゝろよる柳原のこゝろ　枝直
うゐ山や花ちる比の瀬見の谷の水もなほ見や渡る　真淵　契沖
浜風やさゞ波寄るや川のつらなき八幡の宮居は今もあるらめ　杖固
よし野人の花しるべひつきつゝ吹山よしみてゆきてかへるさ　宣長
神代より花山の神しめし霧深きしのぶの山　
あらひなきさゞれ山をちゑとのすゑはるかにつゞく鳥羽の　契沖

花よ鳥よ紫よいふことは人とわかれし花ありし山の　千蔭
ゆきにけぶる錦乃らけしき大路えてあそびゆかしきかな　枝直
ひとりすむ野辺の月影かぞへつゝ庵守もやこれは行くべきふる　
かな月はらぬ見の花ならぬあはれ山の松の影もとつ　
かくとやさしうゑしひろき世のかかれてすめる水く　直蔵

春秋の花の錦の中に
たつ山を越えけんなかなか夕瀬の月かなく　久光
行くひの名の錦もしら山にかひく雲は雨にかすみ
いはほのかげをかみの中に
ほのぼのと晴れ雲に見えてゆきてよふるに吹にく　長野
住にまさてせぬこゝろを

谷

世中はかく浅くはなかりし金のことはりの谷もあらん　志州
ゐるきて見つさるるん山からの谷の中へやるかあるらんや　杖成
かくて世の谷に落ちても谷よりかくれし人やいつまでか　東海
さきの山陰に入れて谷せばくもゆく水の奥　枝直

澗水

澗戸　須

谷の水もすだくやらんゆく夕かげに浅き流れたるにしりて　春海

山畑

たまゆらは畑の人のあとをとめて流のうへにとまれ　千蔭
まちかねて畑中にふりて折かけて春の…入の里

関

いさ別れむくらさくらの花あらしの関　成章
あはれ関こえなやむ夕がたの八重の…
男をとるは人の関しるべも世の中にいりて入らむ　東海

関路鶴

きぬくは…かへるを…世の坂の…　枝直

関山月

あけぬとて帰る山路の笛の音も月とすみわたる峰の嵐　千蔭
そらひろき嶺まちかねたる月の夜ぞ更けて八重の山の霧も晴れなん　契沖
ある夜のやまかげにすむ月ぞかはるらぬ山の関の戸　志州
水上へたてても幾重の山の峰々より関の関の瀬　鶴足

瀧

岩がねよりおちくる滝を越えれてゐる滝川の水までも　秋成
たちのぼる霧をかかへて人の袖をぬらしてひろき滝の音なる　枝直

飛瀧　吉淸

そればかりはなれたる岩もひとしほすそに落ちてくる音　土海
あらし山松風も滝のひびきあひてさむき瀬の音　千蔭

布引

滝川をよりつきて流るるのみかはてしなき世のまにまに　海量

岩瀧

たとふ岩の滝のおとに老人のかみて立ちぬるる

山中瀧　…

水上へ行きてたどる山路の滝の音ある峰の嵐の風　千蔭

川

名取川

とし月ハ移られてけりな浅みどりその名取川よも瀬くらし　成章

ちる花川あさみどりして行く水も浅きにあらずやかけしをかさね　千蔭

埋もれ木たえせぬ名取川岩波高し瀬々のまに　契沖

田簑の川霧も時雨もうち渡る深き紅葉をみる　久老

桜川

まさにてなれて久し桜川花の浪くをかけてしらく　枝直

桂川

久方の月の中なる川とこそけふの水にぞ桜や天の原　宣長

天龍川

きよくすむ天の中川なかれつつ紗織りて神代　吉開

海路

見つれても夜ふかく舟こぎ出るあまのはしの　枝直

大君のみことかしこみ大海の原の志賀のみちをも　直彦

風吹けバ沖つ白浪立ちて見ゆる川ひてろしも　成章

伊豆の海を見つつ行けバ波高き沖の小島に夕かくれ　杖成

海辺夕

こぎ出る舟まちかねて浦の苫屋にけぶりたち舟を　千蔭

わたの原底ひもしらぬ浦の上にけふも暮れてゆく舟　民子

いさりする海人の釣舟に夕日かげさしてかなしき海の浜　久老

新川の夕ハ冬あつくしけふもまた稲田の松に　契沖

舟とめて和田の浜松さしいれて今の夕べにまかれる　海量

名兒海

久かたの都をとほく来てあふぎ見れば塩やくけふりの　枝直

ふりのあまのたけびに松しまや名所の浦の世をへつつ　千蔭

あさの海のあさひさしたる霞にも見る人の浦の浪　久老

浪ゆかの秋さへあるはらの子ら宮の沖にくまの　枝直

妻ならぬ君のまなくにかなしき浪のまく入江の海をも

たつ旅のなくさめなしとてよその松のしげみ小松ハ

海辺烟
芦荻のしげきをよそにたつけぶりあまのしほやく煙なりけり 千蔭

浦辺烟
しほやくとよそに見えつる浦のけぶりあまの分るはきえもしはてぬ 吉洲

浦ゆふ
みくまのの浦乃浜ゆふさく時と百重の浪乃よるをこそ見れ 春海

かさなれる雲の海乃八重の浪幾重かさなる浦の浜ゆふ 季寧

いそ
太刀をとる浦人やまの縄をなへてよるよるはいそにあさりす 季鷹

ことつくし
難波江にこぐ舟のいかりもとりかえしつゝ世をもわたらん 杖成

浦ちどり(?)
さゝなみの浪のよるよる帆をひき打つれてなく浦千鳥 吉洲

おきつ(?)河風吹きしまきてあらき浜辺にこゑもせずなく 大江の木門

釣舟
大魚をつる浦の浦乃夕ぐれにこぎすてゝゆく海士の釣舟 東海

漁父
ちかひの浦乃波にゆられつゝ鯛つりてよるべの釣舟 杖成

人のもとに桐良浦の名をおくるとて
はまべつゞき浜の名を松の葉のちるちるにつゝみて 土満

磯
よせかへる浪の磯のいはほにかゝりてもゆるがぬ浪の音ぞたえせぬ 芳尾

磯巌
沖つ舟よるともなきいはほの苔のあをみて浪のよるべは 吉岡

ありそにて
やまとのきし磯のいはまに見えつゝ見ゆる 千蔭

下総のくにへまかる時銚子の浦にてよめる
雲とぢて見えずなりにし沖つ浪ゆする沖つ白浪 春海

海上の銚子の川のみなとに海わの舟のかよふ

鎌倉にあそぶ
たてりめし浪にうつる人のこゝの磯もとくろまでする白浪 福男

湖

伊吹山いつか颪吹ちてあつさハ湖とかわりける　美称

舟うかへて見る月影よさゝ波かあれ海の底をゆふかね　猿足

名所　湖をわたりて山田の浦よりくゞ路

雪のみる霞のきれハ世人てみれ湖ハ行くへうるらん　千蔭

瀬田のなかれなかひて桜谷といふ所よあるらひて

ゆふ日まく春の山風ふく舟のまほよ行く浪もゆけし　蓼蹊

とことて波の花咲らくる岩ゆゑ人ハ春もまつまし　猿足

池

名所　広沢

よも跡のいつはり浪の月うかれハはるか底の志らく　東海

水すみひてなかつほてハそくひてん池の人気なくすく仗　杖成

うつ月すゞ猿山の池乃広られ稲葉をつゝむ舟ま乙のり

井

菅原の古井の水も宮ふるよりて昔ながらて志るよりるる　千幹

ほり井　志ら井　志ろみれハくむ人をそりひつまさりやまより御ゆつかすみの水　蓼庵

汲井人八つ世の中にとて旅はつゝの井をハなかせし　春水

世をわたる身の浮き橋ハ井くよかつ又えすみもあやうき絶り　東海

橋

橋よかる旅もあはれ橋うら旅いく世をしにきつわすらん　蔵幸

橋　雨

旅人の渡く橋よ雨ふりて雲かくちわくる東雲よ浪の橋　蓼庵

名所橋

今ま旅志のひそかわてるをもあまた通ひまず行へすくの絶りし　千蔭

めそ郷の橋まふみ月の橋よりろそ後の雲まま行へふまもけふ　猿足

水郷鳥

鉢てゐやゆけるこゑ水よ鳥ちるの鉢よ八雛の絶そゆくれる　千幹

秋水郷

あふちらぬ浪の雲れ夕くれハいつくもあれし秋風そふく　志渕

水橋有佳趣

ゐまた辰川板を敷きそゐまれ世ゆ旅らせよハわつかへるかいく　東海

惜逝水

浮雲乃ゆく末もうく浪も虫のそれてうちなみよ涙そいさなへ　枝直

野

玉川と名にし流れは見ぬ人もかつてはさ今ハ見る人もなし　盛章

里人の作てあつる野井のほとりはさえ〳〵まさる面

ひとさめ花宿ハやさまうつされて野末の小川そそぎさゆく　杖成

名所

ハこらぬ世代の恵を貯ふまうつ蓑を笠へ乞さし野の原　枝直

霞よそへ名ハ千草さん乞さし咲やさして行にめでたき世く　東面

杜

秋ハくさやくしも雲のなほくれぬぞちる花のこゝやとまかし

帰されていつくまぜさそはこそ老その杜にいそうと見へを　美椿

むすひ捨てる枝の名ばかりの中に

さへへて老その杜をもちんといつ里人こそうやまれける　宣長

むさしの浦にあまくひるつゝて生田にいさて

帰るまゝ旅の衣にやうやうけいくやの杜の枝の中の花　鶯渓

道

翁さへ八十をのこえ行ぬをひとつへ春のむ大路かな　千蔭

いましへのまれ寄よりつかいし春の坂路のおもかけ　正岡

かもなくて行つゝ世を捨て問ひく人住まいの里　東面

里

かよひ

旅衣うはたえ行の村のむちらくをしね衣は旅ゆく里　枝直

住しさまや春ハさうあや大塚して旅にくるとも花くらの生　福雄

ちくさの里

いつのまくまれハきふりそ日をやちく花の里にあれまつくらさし　土彼

眺望

あくとえる雨後の海へ行を見に浮へ来るやあまの釣舟　千秋

海眺望

はるまるさその入日乃末浦て雲よう浮ぶ帆さの行くかな　喜美

あさはるく流るるに浮ぶ舟乃月の浮へやいらうしまに　

浦眺望

春乃世の松つくるるにつこいかの浦のこ花をとちるゝせ　枝直

名所眺望

行河の松乃末張ハ流れるを夕日くまれに帆行かし小山　季居

湖水晩望

そのかみやかすみよせけん志賀人の面かけうつす唐崎の松　千蔭

うみやまのけしき晩望を

あかねさす八十のみなとも夕ちかくうつろふ影に山かげみえて　富暁

江晩望

夕なぎの入江の浪を遠ちかく見わたせばあはれに暮るゝ海士の漁火　枝直

川晩望

雨はれて夕日のかげの川波にうつろひて見えけり岸の松か枝　綾足

くれゆくや夕日のかげは川なみにうつりてとほき山の端の松　春岡

別

わかれ路の行末とほくへだつとも心はなれぬ契りなりけれ　貞次

立わかれ行くもとまるも一日とてけふのわかれはしのぶ世ならず　在満

わかれてもまたもあひみむ命さへかはらずあらばいつかしるべき　盛章

わかるゝも人の心のかはらずはまたあひみむの契りとぞなる　枝直

旅

旅ねするはま松がえにかゝる夜の月もあはれに見ゆる浦風　契沖

行旅の草枕いかにむすびて旅人はあかしかねけん夜はの浦風　春海

旅ころもかさねてうすき夜寒には宿かす人の情をぞ思ふ　春岡

あさ霜の野をわけゆけば旅人のかよひぢしらぬ朝ぼらけかな　枝直

あしびきの山路をこえて旅人はあしたの雲にまよひぬるかな　宣長

旅人のゆきかふ道の夕暮に里のけぶりを見るもかなしき　久老

山ざとの夕暮ちかくとまりせむ宿かりそめの旅のまくらに　盛章

旅衣ちらすはなも春さめにうつさのそひおもひあたりて　未海

春山のふひたらろを

杖　旅

志れならぬおもそたゝ山のやま桜まつも来てたむとのみなくて　吉岡

そら海さ吹えの浦乃月てやろ旅をうつさ袖と浮ひけん　吉子

杖旅の山をいくへ越ゆらんあまにあらしま秋さすりせく　菁蹊

旅切友

やる友よ松風つ針の杖ひかる旅のま袖におそれさやそらう　枝亘

旅衣

かれらし世あつまめんつる都まゝへゆかれおもさめて

一枝うる花さよあみぬ乃たなまんらしてかうさぬるん　契時

ふあるへよ一枝の花をもてなくもかれあすのつゆを

枸をし折り花さ草の時ほうつま折てよするを　杖滅

旅衣虎

ふるのよそ枕あらしよあるをみかう旅路を浮さるらん　枝亘

やまひつるきぬ枝葉よおぼろさし雨のつきやよやそのるるよひ

さうらはようつ雨ひくく降おろうくれハ

すかのふひよりきぬしき雨も身よ残あつるふうさしき風そて　大平

古の濱のうきやまやとりて

しらす宮の濱のさと乃よろ枕うろ旅を去の人夏ましかし

うすや

ここよ花咲し此代より五十路まうこのう渡やたにさひ初るん　千蔭

罷中底部

志はしのよ鏡のうさを見すれハはるかみやさゝろゆかまし

四稜中記

春あらたゆう紀にそ白はなつのあしても見つて袖をとみすつふひうれ　吉岡

罷中時雨

都おて妻ぬつまをなすらんよ時雨うるなうさうを友乃原

罷中晩風

そのとしあてやまう人限よりかしまつふ雲ゆうみ人ふおもうなは　志添

夜おそらすひれ候よ杖をかてタクせるうゆ〻つまうや　契冲

羇中衣　からにしききてもきなれぬたひころも思ふの露もなからって　契沖

羇中山　きえ残るつの山路より待る旅寝のあとも今はまた見えぬ川し　吉河

羇中關　都へのとをつあひ白川の関ゆく佐の枝の紅葉せ　長樹

東路の浮人の関を越ゆる日八田の白雲今はいつそかは　契沖

こゝそ古くて誰はつれし佐をみさきしも見えし川の関

羇中海　八百日ゆく月浜をみて我ならむハお松をまつる中浦となる　長治

あかきやまむそて都みつとせんなみしまの波よおくるまま　吉春

旅　泊　ゆふ月かけさすそむあすらぬ舟でうきねの波枕で　東海

さくはんゆきよなりやむかさのあさの浦よ一夜ねさと　枝直

夜　泊　浪あら礒を浮人するから枕の夢さへ浮て夜あすてなし　成芙

旅泊夢　浪立ちて塩よする礒のうき枕むすふ夢さへ波まくらけり　久老

旅泊雨　かち枕とまもる雨の浪もれやぬれはその波乃こゝろは　枝直

金龍寺にて山縁前の旅人舟まてくるをまちける日

あし原のむまやをくつるたひ人の袖乃むすめも浪人なき宿　誠足

あつまへくたる人におくる

いさ人の旅の宿りよ浮雲をみちあふて君ハゆくらむ

西のくにへおもむく人をおくるとて

いつかまた浪のうきねはすま川へ舟ならしておもひやるかね　常謙

わかれ人よるみちにわかれむまさよ

さは又やるそはうしわかるゝ浪枕のみち浪よあら　氏子

遠江へくたる人をわかれおしみて

君かゆくあたりあつしもあつく渡る名の橋そすきて　契沖

友のもとへけりしたによみてをくりける

わかれての後の人をまつるかへてはひきせすそとめまし　ちは

おくれゐて旅ゆく人をおもふらくを

去りゆく人の宿するさかいせん空をきくめとうへかさまるかり　意巴

梅の花乃師日[illegible]の絶えて都人湊を遊ぶ

あはれ[illegible]のよそにかゝりさゝ[illegible]のときさん[illegible]　千蔭

八月ちくさ賀茂川の人乃やらひをかきしに

いつの世よりかはれむかしのそ[illegible]よそ[illegible]の酒ゐ　久光

よの子[illegible]の[illegible]を入て秋の園に[illegible]なちまし後[illegible]ける

ゆふむかしふゆくらしても大[illegible]やまぬる[illegible]のこよひ[illegible]　[illegible]

秋のひさしの[illegible]まちさおん旅にまちぬ[illegible]人こそ

たつある稲荷山のわたりに[illegible]人にさそひてをたすねて

わかすてゝいそんの[illegible]もなし[illegible]人に[illegible]　氏子

よろこひ[illegible]んとする時人にわかれて

わかれさそ文和[illegible]まて[illegible]めつし[illegible]人[illegible]あるや　[illegible]

都へまかる人に旅やるとて

[illegible]の風よ[illegible]くへてそ[illegible]　千蔭

都のこゝろよろこ入る折をして

天の原やつる乃師よゆく人[illegible]の[illegible]

旅人[illegible]をとものさそつかはしける

こよしゆくの旅よんのいきれて[illegible]やめてをちいそてゆくらん　秋風

[illegible]

あひよは[illegible]旅の人の桜を[illegible]向の[illegible]よたむきてすし[illegible]　田中道[illegible]

行路
待人

椿市にれにのゆくてにいそぎなるひあひくる人もあらなん　千蔭

山家

山さとに住つゝましきをしめやかく花よりおくれ雪よりも白ひて
山川の色ある人をとゝろきて花をいさゝか露のしたにて待　契沖
わすれゐても秋のくさはなきせと風にさらふよ秋の音くさを
訪人は庭よりつもらふまてに秋さへうきをとはれさりけりや
山里の空ちぬれにのたてつらさとりひろく人さらはかなさ住
ありとてもやすきを知らし柱に世かいてわか世からつまさとさ奉
住山さとはなる人さへこふりし秋の身よし峰のおくよりにはしら　長流
れむすふ山水の色の法の外のとりわきをさきまくり秋空の日を
山さとはなきつさてられはあかき清き事一秋をもて心ぬも
かくれなはあめを人のまさけなくてに秋かきふらむの世くなれ　宣長

山居

谷ふかく峰まてひろく山さとはこれをはなれてあふみまかせて　成章
むかしみておもふ深さ人そ捨しうき世のなかそうかりけれ　季鷹
訪ちるにし柄さつゝふ山水のすむまにまかせて身をのへまかる　尚寛
なかしむきかさん人ならまつにかふらぬ山のおくれさりけり　春海

山家雪

世のうさは尋しいわれは住かけに宿ならぬ雪をみちなかりけさ　宣長

山館雨

ありし秋のあか山かよる風の中の訪人秋の人よさらせてしられ　春洲
まうら見ゆる山里ぬれてふの秋は宿せぬ人もいわされそて　民子

山家嵐

うつはりもなてあるあ訪人ありまてもうとさへ枝あらし吹嵐　枝直

山家風

住ふくはうらやむ風をあるなん秋はちられ秋の音河合せ　宣長

山家水

夜とふ人てすむ山陰の世に清みなくて世中はなかれいふらむ　季鷹
おもふあまれはさる山清水かくもなくさもなつさにて　民子

山家烟
とはれてもうれしからぬを山里にひきそへてたつ煙も山の庵よ　春海
かげふかき松のたかねに煙立てたえず嶺の谷の山のふもと　枝直

山館烟細
あらしふく峯のふもとの岡辺にはありとも見えぬ煙なりけり　千蔭

山家夕
山すみも千年を経ぬるあはれさは夕べの風にさそはれにけり　蒿蹊
山さとの夕日の影はさしながら雲のひまより見えし山かけ　枝直

山家友
まれにくるかけの庵こそあはれなれ山里人の心しらずも　春海

山家巌
うしろなる山のいはほの峯ならでおもひかけたる世の中ぞ　盛長

山家様子
松のはしたるくなりぬ山里の岩はしるなる庵をも　蒿蹊
ほの見ゆる年へし世々の人もなくてただ岩のうへにすみける　千蔭

山家鳥
あさ夕ことに訪ふ人もなき庵にはなきて音のさそはれし　民子
すみなれし雲のゆふべの山里に鳴きかよふ声のかなしさ　土満

閑居
わすれてはむかし見しより庭にも入らぬ人もなし　文伴
さる人のすみてしならひをとりて門をさしける　子彦

閑居友
山かげのさびしき宿に住まれてそむきはてつつ　枝直
さそはれしほのかに山の奥までも相思ふ人の友とこそ知れ　季鷹
いつはりの人をまちたるすみかにはさしもあれば友なる　民子

蒿蹊の閑田居をとひて
ふりぬるも人をまつらむ　住みなれし庵のあとをとひつつ人ゆかし　秋成

閑居経年
はるばるとやすらかに住みしかば昔の跡もとひくるものを　春海
ひとり住む庵のあるじ年ふれば身の憂き事もわすれぬる　文伴
かくれ家の松のみどりの色そへてわれ世をいとふ心かな　久老

嘯虎
さよふけて山のおくよりきこゆるは虎の声かもあはれなるかも　枝直

菴

雨あられ凌もはし かまへて世の憂さすむその庵く　車両

かくる庵葉ちりてもなきあれは門も閉ちて畑をけり　子争

かくれたくつまれこそ夜すれや秋の初めの庵かな　春河

白雲のとまる庵をおもひきる所すむ雨かたえ杉の棚　杖成

鹿山雨
松の風流てり

わひ人の手ことにかよふ松風の音する庵の静けさかな　民子

清風隔世塵

よはまつ枕の秋や世の花をこそいつくし　あかくしにくけり　千春

閑栖の侘しき折ふしかつほつりつてゆくそ

しすかなる雨の夜まくらふ我の宿を静かの床となしても見えん　杖成

菴を鶴居と名つけし八聖人鶴居鶩倉の跡にあるは鶴の舞居

春を迎ふも花の法にある秋の夕へに入りて いそくあらぬ世を閉りよ
まそいつより朝の月に候こそ

秋よりもまつ人の世にてもあれはうつろひかくれはくるらんすまるとも

かはゆきを世やはけをおもひにくまれらんとあやしうて

かくてるや世をさえつみわひてわれもいさまほしやんよせよ　民子

須磨の秋の暮まて

月もみえてすゐ今宵あらしの庵の縁の風の鳴る山際　久光

草堂深鎖白雲閑といへることを

とふ人も空きる門をたゝいて夕暮へ我の心なき　千里

門杖

いかにしも人なしとて杖の門まら入宿をまつとまる夜や　民子

市中隠士

ゆくも共に市の井にすなれても独さわねる隔門のれ　もの

窓

ふき入てたくる紀わか身ハおもひ出れはさらに今まて窓のうち火　春海

住の江の松か枝さす窓の紙きえたるあらしの世ハきしも　秋成

竹窓夜雨

ねさめにハふきそ入る窓の竹の葉にさやくなる雨の音そ秋ハ今日そあやしき　宣長

幽夕

大路ゆく人の音も絶ぬるにや軒にすゝしき夕くれはかは　千蔭

林暮鳥宿

ふとの一村にかれそゝまうてゆくハ深山の奥へなかりける

林下幽閑

山陰や出けるたつの外しめやかにひかりたるもりはさひしき　成章

幽径苔

ほその苔の細道つたへてゆかまゆきもえぬにふみゆく　蒿蹊

苔

昔ゝゆく風をはらひてしけき山の苔の下ゆかりハ苔むしたかなし　盛孝

あさきけのさくらハちらしさりゆくの花のさかりのまゝちりせよ

巖苔埋路

山さとの苔乃上はらふ人もなくあとたえまさる　春海

芝

ねなしねの芝にかりてはまた枝にうつるハえたに　千蔭

ゆきし後のの芝生かれにしかとも入の心とハ　直臣

田

降雨のふるの名と手ちくまてる田に刈田を稲のたまく

田里

むかしせしいさとハひとり田つくりの里そにさいはひ　千蔭

田家

まれのあけくれつゝなかしを忍ハ小山田の里　蒿蹊

小山田まつくらかりのかりそめはいつをかりまとひすゝ寝

つたしるれやしわくけはひかたの夜の稲た田ゝをとたゝ伏せてもて

引くへし山田ゆけは縄くちかたかまねしかふせ絶　枝直

田家鳥

なきさくのかり門田の稲にほまれくゝにたてハ仮の村すゝめかな　秋成

田家興

枕かちさ小山のかたけなる落ちつかれてゆふさまをもる外に　千蔭

まち枕野にせよらをまちをる

松

さゝ浪の松もしほやまあくれて花もなき春の行 [illegible]

そのかみしろく松のあとられなるをうつる

まつ松をくふの山桜花のみちあるとまなきまでまつやはらかに 芙沛

まつ松をきりてうつる

れわか松枝をも見るまでしもくかゝるその松かな [illegible]

おけるやまにの小松二葉をまつ世の名や生ひて 芝外

ちはやふる神にあらはいはゝむし一もとの宮の松をまもらし [illegible]

よよ世へんまゝ八松をうるはしくまつ行の見ぬ松なりなまん [illegible]

笑くの遠山松を見わたされ八雲にふえて春を消えなで 杖紫

まつ松の花にもあくをきぬ松のやくりて千代を待ちかね 千陰

神山にみつ葉の二葉より年世の緑なる松かな 李澄

嶺松

子日にもしのぶは峯の山松こそは千代へぬる 良子

白雲の松にかゝる山の松こそとしふる 土彼

岡松

ゆふくれに大空の岡の松かねて 千陸

水辺松

大井河入江の松はなくて老木なりけれ

磯松

やすはも松の木をそへなん浪の [illegible] 枝玉

名所松

この浦松わかちたる浦松ある 良子

嵯峨山松

ゆの山松しるきを見る代にわたりの松のみどり 宣長

曽根松

あけぼのの海ふかき土のあるの海松 海宜

松風

よる人のまゆるなくさきを松風をうらみん 古彼

小松

松をけふ日出る海あり

子日まてめきそのなかに小松ひとつ日をふたたび [illegible] 真之

庭松あはれとて

すゞしさは枝さへ[illegible]なる松を植てこそ　氏子

芭蕉翁をはじめて[illegible]松の[illegible]あひて[illegible]
の[illegible]あそびてあ[illegible]の松[illegible]
[illegible]ひて[illegible]なりしかな

[illegible]の子[illegible]松の[illegible]あひて松の[illegible]かり　杖菰

かゑし

[illegible]二本の松乃杖の[illegible]人[illegible]まち[illegible]　芭蕉

松と竹とを女の[illegible]

[illegible]かく[illegible]なる松[illegible]　[illegible]

松の[illegible]をなせ[illegible]　[illegible]

竹

かゝりなき[illegible]竹[illegible]
[illegible]かゝ[illegible]の[illegible]へくなり[illegible]　千蔭

里竹

[illegible]代へて[illegible]人の里竹の[illegible]　上[illegible]

御下竹

[illegible]竹の[illegible]　枝[illegible]

畫圖竹

[illegible]の[illegible]上[illegible]代の[illegible]竹　[illegible]

扇

の[illegible]竹あり

[illegible]竹の[illegible]杖[illegible]の[illegible]　土[illegible]

竹の[illegible]

[illegible]竹[illegible]の　[illegible]

竹に山[illegible]

[illegible]の竹[illegible]なれて[illegible]の[illegible]　千蔭

書

えやはかきつくしも筆のあとにて[illegible]ならぬ　芳岡

よしや[illegible]のみ[illegible]ふる[illegible]わか[illegible]あとは[illegible]　春海

[illegible]見れば[illegible]ともし[illegible]友をあ[illegible]よ　千蔭

[illegible]わかみよ[illegible]はあるぬ[illegible]ゆくへのたかく　春海

詠古人書

わか人てとふもかくるも[illegible]　[illegible]

披書知古

[illegible]ふかれての[illegible]甚か[illegible]あ[illegible]

披書思昔

[illegible]のあとよ[illegible]まて世[illegible]を[illegible]し　枝直

書をよむ

枝折[illegible]ても[illegible]あとよ[illegible]し[illegible]　春蹊

[illegible]たつ[illegible]の[illegible]枝折[illegible]て　宣長

[illegible]も[illegible]のよし[illegible]を　[illegible]

[illegible]との[illegible]を[illegible]　民子

うつくしき机をよめる

書のみてうつくしき机の名つけるうへそわか友ハ[illegible]はし　契沖

[illegible]ゆくすゑハあらし硯の海もつきぬ[illegible]　春海

硯

[illegible]むかし[illegible]かくれなくてかはらぬ友ハ[illegible]　宣長

硯の[illegible]をよめる

たのつる[illegible]地の[illegible]そへて[illegible]　千蔭

墨

すゞやく[illegible]のみせて[illegible]のかゝ[illegible]　宣長

筆

この筆よ[illegible]をかきとりて筆ハ[illegible]を

むかし今の人の[illegible]筆の[illegible]て[illegible]を　春海

紙

この[illegible]あれ[illegible]なかれての[illegible]　宣長

人はかりそめにもせよ[illegible]

[illegible] 長流

朗詠

[illegible] 文詞

[illegible] 千蔭

[illegible] 春海

歌

[illegible] 長流

[illegible] 契沖

[illegible] 千之本

[illegible] 宣長

ふるき机をよめる

[illegible] 契沖

[illegible] 春海

硯

[illegible] 宣長

墨

[illegible] 千蔭

筆

[illegible] 宣長

[illegible] 春海

紙

人[illegible] 宣長

ほのやにゝもゝ[illegible]かくてのうらに住てふまずし　[illegible]

ちきに[illegible]風乃[illegible]みくさの　[illegible]

朗詠のくらべとわらちゝ文詞

[illegible]人[illegible]の[illegible]みちのくに　千蔭

そのこゝろハつねに[illegible]ありとある　[illegible]

歌

まの集[illegible]見ゆるもの[illegible]

難波はのなにはにわかるあしつてまの世に[illegible]の[illegible]　春海

ちくさのにほふ神代の八雲まの世に[illegible]けてをとこおとこ[illegible]　契沖

月[illegible]つくれるを紙のくちなし

をとこにいさゝか[illegible]のさ[illegible]見え[illegible]のうちれ[illegible]　千蔭

[illegible]

[illegible]人[illegible]の[illegible]時の今までつまあし[illegible]　宣長

古今集　あしひきのやまとうた神代のむかしこそせよつくりなれ　千蔭

大平[illegible]世乃[illegible]とまりて[illegible]のみ[illegible]さへ[illegible]

つらぬきて[illegible]をとりて[illegible]あまれ[illegible]

なき[illegible]あやしみて[illegible]かへし

六歌仙の題よ

男をとなく[illegible]神の[illegible]乃[illegible]のむかしにしき　宣長

赤人賛　その[illegible]人のは[illegible]路[illegible]山まで　秋成

素性　わかの浦[illegible]ありてきけハ[illegible]　契沖

喜撰　[illegible]の[illegible]と[illegible]嵐[illegible]のさくら[illegible]　千蔭

[illegible]月[illegible]

貫之　晩の[illegible]あへ[illegible]月[illegible]人を[illegible]　千蔭

紀の海を土佐乃[illegible]　[illegible]

狭衣の巻　わかれにし井手の玉水くみてしる人もなきに袖ぬらすかな　季鷹

伊勢物語の恋歌のこゝろを
　ねぬるよの夢の行衛のたえだえにはかなき花は小野の志らつゆ　契沖

大和物語の生田川のこゝろを
　いくたびか事の心をしらねばこそ身をしる川の水はなかれけれ　芳樹

宇津保の物語
　時雨ぬる音をもらせし琴の緒のねさへやうつる日影かな　千蔭

としこへし花の霞はたゞめぐりて見るかな
　花ぞのの夕ぐれならむ琴のしらべはたえず川波にまぎれて

とめくる人あるがもとの花の夕ぐれ
　栄花の物語を見て　春海

源氏の物語の名をよみて

桐壷を
　春の日のかげもみえず葵のなみになこそなかりけれ　季鷹

花宴
　とふことのひさしければ夕ぐれにまつ人もなき宿のけしきを　民子

帚木
　くもらずもあらぬ月よりかこつより心をなほさぞなき　千蔭

うつせみ
　袖のひとつはをしのぶもぬれぎぬの身をつゝむとおもひしを　民子

わか紫
　九重のさくら山桜ながめても見ぬよりも見ぬ里をぞ思ふ　枝直

あふひ
　わかれてもひとつのかざしにかけていまも心のあるよしもがな

花ちる
　人にあはゞ山ざくらこそなにしおはゞ花散る里に袖をひかまし

あかし
　わすれめやゆく舟のあとのなみにしたひし月の月

橋ひめ
　年ふる人の宿をあはれとて月のほかなき人の住む宿に　季鷹

源氏の巻々を
　なへて世の中はつらきものなれや心のうちのかはる心か　千蔭

絵合
　思ひうちすつる身ならばなにかせむ人のこゝろにうつりけるかな　春海
　色ひかるかげしのばれてなほぞいにしへのことのたのもしさ　（以下略）

山水画　落さらはさまのなかれにえをかけて見付たるところから　咸来

かゝるの山水かゝ事は
　まきしまの中にしはあまぬら水よかゝらなれは今よこの筆は　宣也

出かる人は山水か恵をしりて
　老の世は後を人かくては山のめまきもとらむこのまえよ　芳鼓

福禄寿の国大をあふきけるに
　天の原ふりさけえつるか利有内に[illegible]紙

三面の大黒天をしるしてのことにあるを
　ふくれたもとあしを人なりけれは又[illegible]よみつけの神　土佐

布袋和尚月を指させるに
　限もなく出れはさまれも月めえひつきころはなる　久光

九月朔日のうたに
　うし[illegible]や雨の数よせくろくきてはあるをとめし人なし　千蔭

軍人あまりに京よ帰りてゆく
　まへるけふのから帯もちなすある人をなくさめあつまはかや　春郷

佐藤三郎桜を割てその出るに
　花よりも松しけさきそのくらか老よするあし人その紫　芳旋

歳末　書緊子
　[illegible]よ[illegible]くるみのか称の橋行き[illegible]もえよきくしす　杜成

余花
　うゝ桜くるまの山よ[illegible]やうまよらて自人青くせ　季房

円同帖
　松[illegible]のくれ民まさふしあまよ[illegible]な世よおそくちやまかし　杜成

未曽有
　[illegible]人のあつくも高よ住み[illegible]てめほうん　芳鼓

作人歌
　まつみやのほましかわきすゝ[illegible]や[illegible]て人名八[illegible]人　季房

世にあまねくいはゆる水茎のあとをいふ

古人なやましきうたの心も世によみわたせる世の君いつまでもまたん　宣長

筆

倚るに似してわかるゝなくなる

かくしけしみかきしひよみ給へるなかし人をもまてにしや　蒿蹊

かひあるしなのむもはなるゝふみつられいかしひの人すゝめる

墨

草なきれ文字つかねてもよみのうへぬらるゝちるそたくまつる　枝直

硯

人の家ごとよくうてつきかい

ふく所まよいの白とゆくこしおもてまりけふの清き月　氏子

紙

まよひのいは人のゝてとけよるすやみしゝならす年

わかるなよ時よあつまてなれの里　枝せちられすの契を　直芸

冠

烽火燃けりの代かみてかゝるへきをしまつりかふ流れ　千蔭

弓

ふくよろうしふもちてむ梓弓もつ清世まても引くして　春海

梓弓ものゝもあれとはゆめの八さまにしたがの辣代もよき

矢

そのかみのあつれはゆしかすゝもいつものよ冷かすとせん　蒿庵

六種の[illegible]をしめしれ文のとと绾ふふをて世よこそとかれ　春海

琴

[illegible]の大をくらくらの清いはしのまま人見ふそて世かのね　

あつきやあつまでも名のつまかはいゝはなるこえのかよふ人くく　春岡

大八洲の春風やそる琴よりこそ神代のすわすゝれ八雲つ今き　千蔭

笛

引くて舟あそびつくれうらのよものも秋枝風をこゝのうへくく　契沖

うき世の國ふき声く万代まてるて笛八声ひきよるるま　真岡

うれつしもわするけるるよ笛竹の世にすれるるるをいひし　春海

穀　倭文　布　綾　衣

うゝ翁のいつめつゝもつみてすゝとの表なくいつらもわむしろ　玄門

いつしへの志済らゝ衣さしせるそおりくちてそのとも為をおなり

神わざのあさ布衣神の代乃ふりの昔偲ひよるをしのびつゝ　千蔭

あやなる綾をとさ秋とりゆかりすやこハ宮操よおもれかるさらん　春海

あやをとへりつの世よみてわかれて人の様なもよおすらん　宮老

紫やあまぶ衣もちえんハあへしきよさ神代の山あおの社　東海

人の衣をかりておそくらへしやまて神のうちらく

茅　裳　組

うつ衣つゝれ久きりそとめしばんすりるおもひつてこそ　民子

仮初よけし旨の茅もうし法ひもあん女契ともり人ハ　春海

ほせの床ゝつて翁もをとめすの清さ童もハんかひてある　東海

くまあるもえ作るねともの道りと竹とゝの山乃暑気しきよ

鏡

鈍さの鏡乃郭よけろさし宮ハさえるて年を一とめり　千蔭

たまやあおくけのうえんさ今つゝそりるやさしからまし

大空よさ院のうみるをもかくもかしこき神の光みそ今とくて　東海

本　誌

まちゆひのかまふハあせて今もをとめの数よむれてかまぬ

ほりしの夜乃由見ゝひるうつりしおふとよ

まあらつもきさ花をさしもまかのわれゆひよおもひけまん　芳隣

笠　杖　薬

天の下あまつくまもも大空のそら乃山の佳よおさなれく　東海

つきに息をそえつれ分るなと書をさするみつけりゆくせし　李膺

いゝまつの名よりまなへすをさの人よ今もあわれを　千蔭

香盆といふもの

あるきもをうれまよらそひてもれよ此も白衣のる　宣長

佳茗似佳人

すむといひ涼しといふ句の外に 佳茗似佳人といふ句はかくれなき友　杉風

つよき葉と薫てあさひの光とするよしある

あらたしき春の末乃芽立を摘て薫てんは枝の花よりまさる

古也幸の仕方の緑を蒲といふ人茶は先をつくりておくらるよ

茶の名はさまもあしらぬを作の始よなしひさき末は頭乃皮まで

答

龍

箐

ほかの始らは穂あり乃初めて小さき摘とゆやなられや　千蔭

かくられは秋の花を作りまでもあひらうつそふ世よ

鶴

縁よかくる乃姿とまる人の性も乃ひとつよありて近んん　成幸

枝よよそほひつ花も来る塔の方のゆくるのまもせ縁ん

むさしはやすみたるかよ薫るの一茎さくなせてきらも　枝吉

名取鶴

鶴立洲

おくみても音なき声は雲の上にきこえあげまん竹の雨塔　東阿

君が代のせ井は浦にすむるははやまや松のとをせき雨そん　季唐

君が代に深まつせぬらんかたなや仲つすささきよ立るあらら　千蔭

鷲

仲つ人のひくつきの鳥尾の投のみをしの羽も身すき　杉成

かく帰て小々はゝくる是のしの翅さまれくし浪岐山らせ　杉成

路鷺

から人のわくつる浦風をまつ鷺のまる人ゝ竹葉の川せきまや　東阿

川辺鷺

ふしつきしよの川瀬あらら一鷺の姿ら色よろのきんのゝめ　枝吉

雨中鷺

かさらし雨もふるにの色さなる乃毛ぬれつゝ鷺立るら仲　千峯

鳩

形見てなもとこそまむしつやる今も八そら乃山林の立之　東阿

何とふくく風よそよきさや鳩の世らすまで夜はを飛ます　杉成

雀

二むら竹の葉乃わくくる乃まのは平板のさの乃影音

鳩

鳩や皆おひ立陂のうき草よく慎つむ身を世の鳩になれハ　東海

雛鳩ふところにあたゝめ

いそのかみふるのみやはしらもやまをすみくるにはなれ　秋成

鷹の生取にならぬ鳩

宗ふらよきしみちにあおられハ水の底まても志ろてつかる　枝直

附鳥

えりよりえてしきれふ鳥はなよりるなかりて所る鳴　氏子

松かゝまくなのめし鐸をいふるる花の鳴る声月の声　杖成

松本の枝にあまた鳥のあつまるをみて

はかなき世をうつしとぬるもまよ人ハう人をおもひ　宣也

風あらくゆふ浪よするはまにすあるさとおのかすみやかなん　千蔭

世中をはかなく見るとも何ゆへとも一夜も保やまし　成章

猿　鹿

猪　牛　馬　熊　犬　猫　蛛

菜のはなよくもうつろふ春の月ほとゝきすハ一声　李麿

あらむつかしひとは見ぬかへて心とまりつゝまねくらむ　東海

丈夫やをゝしき心に猪の牙をさんくとおもふ　千蔭

ふたつの牛の角にとひてまつる杖のふと子をいさめる

ひとつのれかひなしやいや小車のわれをかへる牛にいはれハ　春海

まつとも人の夜のほとゝめる馬のふまへに　東海

照月のかけにそへる山すらも人のかけあらかはなし

ならしとも野寺の門よらされてすさまし犬のほえさまする　杖成

うちかへりかれ猫ひてよこになりて一夜よはなきうかれ猫

世中ハかくこそあり見れわたる蜘の家をわかれの風にて

あらし波を風にうちて巣かまのつちもたるゝよやかるまと　東海

鯨　松浦々さかよ[illegible]　杉成

緑毛亀　[illegible]衣の[illegible]　成幸

聖人　今[illegible]　[illegible]

将軍　[illegible]　千[illegible]

韓使といふ人を

[illegible]　[illegible]

[illegible]　枝直

[illegible]

翁　[illegible]　杉成

たをれ　[illegible]　枝直

妓女　[illegible]　千[illegible]

[illegible]　[illegible]　枝直

[illegible]　氏子

岸頭傀儡　[illegible]　[illegible]

限時百詠の中にて背面美人

[illegible]　千[illegible]

西施
望夫石　[illegible]　成幸

巫山高　[illegible]

養在深閨人未識　長恨哥句題

まつらめや嫁のかくすのまゆみるを咲くにさくほかあんとも　千蔭

在天願作比翼鳥

よそにみしそれも花のとまりよ翅となして天のをを住

人のきらふそ戒怯のこゝろを

うちなひく川の御かたさやめにてよみのこれおそろしかまよ　芳樹

世人結交用黄金

まつをとらすさまに世の人のちひめんとてつひなりにける　秋成

ねらのわさつ兄をあつへ給ひけるをめくまん人すかわすあるあ　枝直

述志喩友

みへよはつらつさせけいさしめて人のあとかたすゝみをもよ

哉や

子ひおか奇やめん八人の子れにやとなりてそおもひはこたさ　春海

老人　今はてもなるもやさし年をへて西まて月とのとまよ　千蔭

老のこころを

すゝ河八十瀬のなかをわすれて八十とし流れのよるところと　ちほ

卯山路の春の其こうちまするよ

谷わかれいらなく又もすみなれし出ゆく人のあとをまつるなる　民子

北川のすらみ其の瀬の音をいかに思ひ

まちなきとをそ愛やすらむその瀬よりまなれるひとをやらん　千子

大方のみ路よりへるとも山のこけさまよつてさのまさるとかくらるし

百とせにちからあまれる年をへてもまれゆくみなわをそれとをし

十あまり三代つきしよあひよるなもしかくるまことものおもひ

書

日をかさねつつよすゝめるよふつそそ神代のあとめてあつくまれ　春海

多

[illegible] 春海

[illegible] 孩之

皇都

[illegible] 松風

限りなき[illegible]の中にも洛陽道

[illegible] 成章

長安道

[illegible]

[illegible]

舊都

[illegible] 契沖

[illegible]

[illegible]

[illegible] 千蔭

[illegible] 枝直

寺院

[illegible] 春海

[illegible] 松風

古寺暁

[illegible] 民子

古寺夕

[illegible]

古寺鐘

[illegible] 蒿蹊

僧侶歸暮

[illegible] 千蔭

宿山寺

[illegible] 成章

菅笠は笠の中に

名をかくしたる[illegible] 宜世

山[illegible]こそ[illegible]川の[illegible]く[illegible] 是[illegible]

入[illegible]の[illegible] 十[illegible]

[illegible]の[illegible]つしと[illegible] 氏子

[illegible]の[illegible]の[illegible]て[illegible] 松風

[illegible]の[illegible]て横川の[illegible] 千[illegible]

鐘

僧

兒の[illegible]み[illegible]

[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible]人の[illegible]

[illegible] 正[illegible]

[illegible]の[illegible]

十二月[illegible]の[illegible]て[illegible] 季[illegible]

[illegible]大[illegible]

[illegible]山[illegible]の[illegible]

[illegible]門[illegible]て[illegible]

尼

[illegible]の[illegible]の[illegible]世の人を[illegible] 等[illegible]

[illegible]人[illegible]ある世[illegible] 春[illegible]

[illegible]人[illegible]の[illegible] 千[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]の[illegible]人の[illegible]

静守ゐこゝろを

こゝろみにあそひわたる海の中にはまた魚のすみしひつまと　喜代

藺相如の忠をとえて

滞代る璧をかへせし人をかゝ其つよさかへ世くれ才をほめ　喜汝

許由 耳あらひ

一枝をおのかやとゝ見る人も世は夢の中よ見え見えぬ人のまこと　玄子

うき世にもあらぬの山乃ひとり住やよつてきとも人の手にも

世ならぬやまつかへてさとりのゝとなりたる今そてそひ

世には人すまへよかたてとあらはされてそて代々の名をそう、

世中のうき人乃手にてまゆ越してよ天のふしてもし　美誘

世乃ちりにそあるまてかくれまちかれハあまよりへてかくらん世を

あくりなるとさよある

かくれ乃やまへうつゆふてせてく語れは世を知るむくらん　喜画

すみかはあくはしらの月のうれ見おもひくいく世のちきされ

すらうにあれそうらしあるくを今そいつよと人のよひそれを

風のふくにほまくらのゆく人なく語すれあまたハあはれそふらん　松風

せまるのはしらくのかねなる

むしの鈴乃声うちあれしまさかる旅とし昔へそくすしかりけ　久斎

述懐

梓川人よかなしひと枝をさされぬみよ君ハまゆみとはく　長松

世すてれハうきことのそてなかほそ々へうちそ深へ今そなる

世中のわかくひつはなてかくし山路のわくひつくはなし

やまとにて八百万の神もみなあつとも浮くあつところへき　契沖

世中の絶えぬはかなくからの市路よう浮き名し

おもひつることにて縁のわすれ貝わすれかたくせしやさしさん

佐山てらの秋はあるをのこと林麻もとなき谷のうちれ本　春海

なきくるのあとあるををうき世のまにはしく世にもうきさ　芦庵

その昔のめくりつゝきにあらなかの世し世の生かけ離れん　成章

世の中はうきとくつけくなき世八神のかわくすくる　土満

かくはかとくうきそのほしくやまらてまた立ちならぬ世を忘む

いかれと八雲の紫らさ佐山の紀のしら紀の花をわくらむし　季鷹

このまゝ八幡の字をしるしにかえとるまとひ人さへつもるし

まれ世中かくはあひつくもまるあまり目にぬくれぬをせつくさん　千蔭

獨述懐

わかれのおもひねすてゝみし夜ハ月と花とそ人をわすれさく　枝直

なにとふることもなくてちかひ人をとゝかくひとくすなはちをまし

おもふ友あるハうき世さみしきおもひかなすゝみハあるる世をさりぬ　芦庵

うきさハとやことに人もいふあきをうきはすけく身ひとつは　氏子

老述懐

いつまて杖をもそれ世に老ぬるまよかなたの月よ風をなとせ　久老

立て世をうきめハみえしと老ねむとうつるやむ時老ハ老をかくへ　枝直

杖なきる秋の月みつまはてなし神の声をきく時老ぬる身ハ　宣長

うきみよみえし世をあかしはれをなきらし時も今ハおもひある　蒿蹊

月前述懐

寄燈述懐

寄山述懐

寄関述懐

寄物述懐

いまこの人乃みなれぬるまゝに今もよそなみえてすきさめやし

さしてはんのなし立かる谷のうき人まちてもそくかゝるのせまよ

波かきハるる野もあるとさゆくえにすむ世さんの山乃ののれ　春海

寄思出懐旧　谷陰の老木の桜風さそふともちらぬ花こそなつかしけれ　千蔭

寄釈迦懐旧　ほとけのみなをとなへせばいにしへの仏のみちもなのみかはやまん　蒼洪

懐旧

いにしへはわがすみなれし故郷の山やまさとにのこりけん　成章

むかしをなのみにきくもあはれなるかなしかへりこそすれ

にしへの今も昔のすがたなれやいにしへのおもかげのみ

名のみして八十ちの春はそのかみのことをおもひて忍ぶなる　枝直

春懐旧

松の葉のわか葉さしそふ春ごとに植てし人の昔をぞ思ふ　民子

杖懐旧

秋されはあるじも今はつゆときえてうゑにし人をしのぶやは　在満

冬懐旧

まちかねてあはれなる袖のぬれてはふるさとにしのぶかな　千蔭

寄涙懐旧

うつろふてもあはれなる涙にて友なき世にはなくさめもなし

寄衣懐旧

人のよはいにしへにかはれどもなつかしきはそのころ　春海

寄衣懐旧

古の衣なれにし袖の上に昔をしのぶ人もなきかな　枝直

寄雨懐旧

村しぐれふりにし袖のかわくまもなきふる里のあはれ世をしのぶ　千蔭

むかし思へば

いにしへもさこそは月日かはるとも昔は今のおもかげもなし

思往事

うつりゆくよをしたへばいにしへの袖をぬらしてなげきつらん　蒼洪

往事如夢

又ちるも見ゆるはすみぞめの世にはなくなくたよりなし　民子

すぎし世の昔の人を思ふにも夢の世なれば袖をぬらして　枝直

かぎりあるいのちの春のあはれをも夢と思ひてあはれなりけり

夢

うつつなる夢とおもひし世の中にかかるうきことなしや　成章

夢逢故人

わかれにし人の夢の逢瀬にはうつつにてもうれしからまし

夢路にも逢ふよしもなくて人ならぬ世にうき名のみこそ　枝直

無常

くものゐるよのはてしらぬなにをかもはかなきものといはてあるらん　契沖

ゆくへなきうき世のみちのたよりともなにゝかけてかたのまんとする　長流

きえやすきそのはかなさは身にしめてなほおもひやる世をいかにせん　成章

あらましもまたさめやらぬよの中にいつまてものをおもひわふらん　蒿蹊

世中はかくてもありぬ月花のあはれをしらぬ身にしあらねは　千蔭

杖

寄杖述懐

あはれにも老のしるしにつくつゑをあはれとおもへ杖なるへきを　民子

おもひ出のひとつとなりてつく杖のおもきになれし人の世のなか　枝直

寄風述懐

はかなしやさかりの花もちるかせのさそふにつけてうきよなりけり　契沖

きのふけふふきくる風にさそはれてはかなくちるは花のゆくすゑ　春海

はなのちるさかりもしらぬ身なれとも吹そふ風にものおもふかな　春海

鶏鳴

ねやのうちにきゝしはしらぬ人の世をとりのねにさへおもひしるかな　契沖

うきふしもなにことゝなくすくしきてさめてみれはそよのつねなる　徒然

人の世はさしもはかなき物なれとなほいつまてとたのむはかなさ　春子

なにゆゑのうきみのうれへかうき人のよにすむほとの桜の枝かな　美樹

きえのこるあはれのかきりかはりゆくあめつちのうちにたゝよふ人の身　美樹

卯月の頃花を見て世の中のはかなきを思ひて

世中はおもふもかなし花のちるほとをしたふはいくよへぬらん　春海

先師身まかりけるとき

なきかけはしのふもあはれかくはかりなにをかたみと人のまつらん　言更

涙にくらすといふをみて

さし来ハおくれて越る杉よりこそてふ　つゆ深かりし世井　芋蹊

黄菊白菊をくみて
杖風ハ百年のよハひをかさねて八人をたすくる庵の　杖成
むかしの栄ハなかしかいふんやかのふてしの杉よりて林の香

菊花売もやかは此宿ハよくやまて北の口の九日ふたん芳まつやあめをと
ぬそたくるよ年たくくなる丸さきのかく今文のやうにかきられて
いせの海や二見の浦かけるちなまむまふくへし人をしらぬ
わかこいよ秋しせたりもま入てあひたるりしる此年さ　千蔭
古今の花鳥のあハれをこそ万代そのくるみすみやなき

咲かさるなきむすめうしろへるくよまし給
見るるは花され来て北けりむむふ波やさひてくるけるらん　支游

文かう一の閏にて身まかりやらぬを
雪井諸も桃まつりせとなのみを仁てとふるあくて恋ひやらま

まれ身まかりしころ
さ秋もちてうきあはれ行へ人のもおもひて涙せる身とそてふ人れ　枝直

妻のうせ侍りける後に
秋のもみちさし人ハさらにちてよくよみる身とゆうすれ　言岡

あるけ之
色かはる菊の下葉をちるあくて露ある身とまるらむけるかも
あるむなしく人もあらぬよ杖ハ寂寥によりてまされるを

南をうつて
きひの御風ふく一めくりれよ宿よ
七そかのもみいろくくせまほし捶まし　かひもあらぬ杖ふれ　民子

墓にまうて
けふ方寄よ妻を折らひそむかしの手汁なそてかへりよ

契沖法師ハ世ニしられたる古ことをときあきらめしいさをおもひて
よくしらせたまひし恵みにやあらむ

なにはかた芦のかりねにかけてありし昔の跡は今もたえせす　久老

むかし人せしふみの跡の稿を今さらに見つゝしのふ世の姿　宣長

亀照傳法九百年忌恵心寺にて卿の言彼傳法の言によりて

鳥もまたなきて昔をしのふらしけふこそその花の法　常践

釈教

未自出

きのふ見しとつる花のあはれいまもさかぬ花の法のよ　[illegible]

いつはるの佛乃位山すゝみてゆくのこゝろよりかへらぬ　契沖

わかれゆく数もの心つくる罪にこそけふれもすてかねよ

人よそにおもひてゆく道ありてわかれゆくも思ひてゆく我

なかれきてあつまる法よ法の水は世の末迄もつきさらん　玄開

人麿の影によせて

言魂のさきはふ国の神代より名は高く世にしられたる人　久老

柿本人麿大人の言のこゝろを

古より今の言葉につたへても神の代のしらへをうつしけり　在はし

芦原の神の代のことはを　宣長

都よりかくれしかくとよみしはなもちいて行末にけん
やまとうた其道の世の人のつたへて世のまゝの言はにあそへる

言の葉はうたの言葉にかへるらんむかし人を

玉くしけふたゝひかへりて花のもとにて
わかしつ　いくせをこえて出にしよりも千代の風にさかゆく花乃さきにける　[illegible]

神代のこゝろを

かしこしや神代の事もまことなる天のはしら [illegible]　千蔭

社頭暁

神さびて [illegible]　枝直

社頭月

[illegible]　久老

社頭祝

[illegible]　春海

社頭祈恋

[illegible]　枝直

祝

わが國は [illegible] 民もさかえむ　成章

[illegible]　千蔭

[illegible] 代の [illegible]　春海

ある人の [illegible] 春祝といふことを

[illegible]　吉尚

人の [illegible] 祝を

[illegible]　美樹

枝直が七十の [illegible]

[illegible] 桜の [illegible]　春海

[illegible] 世の [illegible] 山桜 [illegible]　春海

[illegible] 桜 [illegible]　春海

夏祝　松も竹も茂りあひつゝいやましにさかゆく住への夏ぞすゞしき　民子

杖祝　春の花たのしみそへて千とせふる杖をめぐみの露ぞかゝれる　幸世

よし田の翁の母の七十になりけるに杖の祝を

年をさへよし田の里のよき橋のもとにかけてある人ぞ老たる　吉岡

寄書祝　よろづ代の行すゑ遠く見ゆる哉書をつみてかそふれば　民子

人の五十になりける屏風に松竹ある所に書つけゝる

松の千代竹の千代をもちぎりおきて万代までもそふる君かな　吉岡

人をいはふ心をよみける歌として

松が枝に鶴をこそみれ千代をもちぎりて立るたかさなる　嘉子

松有佳色　ときはなる松を世にうつすこゝろのいろも千代をちぎりて色ぞかはらぬ　蓍隆

寄松祝　君をいはふしるしの松はいく千代も友とぞならん松のことのは　季麿

寄白祝　あまたたび君を祝ひてはしら白に筆もてしるす白の色かな　宣長

寄月祝　よろづ代もかはらぬ月のかげをみて秋の月をながめつゝ君　稲生

寄世祝　君が代はあくまでふかくおもふひの方をまもる日のもとの國　吉楙

寄都祝　古しへの都のうち万代に栄えるあつまりて千代をかぞふる　千五穂

寄道祝　小車のかぎり大路乃まさしくいやまして君が代までもつきせじ　鎮足

天地のひらけはじめしいにしへの神代のためしいまもかはらぬ　民子

古今和歌集講義竟宴道の祝

たゞしきみちにむかひて万代も君のまもりの道ぞたゞしき　千蔭

寄神祝　千早ぶる神の國とあふぎみる神のことのは

日のもとの神の道と天つ社をまもりやいはひそめけむ　季鷹

四海清　筑紫のはてえその千嶋乃おくまても治まれる世ハ浪風もなし　千蔭

幸逢太平代

大御代ハ乃とけきをしるかな [illegible] のとかに [illegible]
うれしくも六十をこえて [illegible] 国乃おほやけ [illegible] 数ならぬ身も　枝直

物名

きしのまつ　下行や [illegible] 男ハえまて [illegible]　長流

くまつら　うき [illegible] 杖の夕 [illegible] 世 [illegible]

ちのわ　[illegible]

きつね　[illegible] 人の衣 [illegible]　契沖

ちゝ車　[illegible] 人の [illegible]

しのゝめ　[illegible]

まつむし　神代より [illegible] 人やさらん

あそひ　えその [illegible] 我恋しき　真淵

かもめ　冬されハ [illegible]

うつせ貝　[illegible] 所 [illegible]　枝直

[illegible] おも[illegible]の衣 [illegible] 千陸

[illegible] 八千種の[illegible] 千陸

[illegible]

[illegible] 中に[illegible] 季麿

[illegible]

[illegible] 宣長

[illegible]

[illegible] 月の[illegible] 秋成

嵐山の[illegible]

[illegible] 季麿

八月十五夜[illegible]

[illegible] 枝芝

[illegible]

[illegible]

相聞

[illegible]

[illegible] 八十の[illegible] 千陸

[illegible] 宣長

長歌

大和の國を讃ひてよめる　賀茂真淵

神ろきの神の御代より天つ日嗣つきましし清まのみことも君大王のまにまに
あまくたりたまひしうちつくにをはすくにゝしらしめしまつへき
八十國もいよゝ高く百の浦もやさしくそれあまの河とよの國はあまりに
たちまちつゝ山それは山いや高し里それは人もあらしまゝ春花の
うらうらにままに代しもうへ数まし玉の八十國はうへもかゝるへし
豆の河の代のことを世をはすをえるかも日まうすへし
大きみのわかにえみくへけるまをも大和の國をたゝえてしよむ

愛花篇　上田秋成

みよしのゝ春さくら花はなをも大内ちよ人を新まのはなのかほりを
まつてすなへ人のしめつけ山の春まひ時のかけをまへにてこそ
よはしさきそ庭とせる櫻花ゆかしふとよりて夜をはなそ風をいとひ
雲とそ思ひ春こそ我をとのめて咲く八重戸をしとゆかしやとそ
はのさえつゝ言ひとそ我にはまりし花ちりし櫻乃あそこいかし八乃
きつるそのほころふのこゑあけましにもて人の宿とはゆるさはそ
せる神乃ことをはまてそくゝ人やくぬ花まつはあさこゆる
里まかて人意よくあおりまたは人とひまへ山さくちりやすみ久と
君はのあくにゝけてすいさそきよし世中悪いをこそ神人
てらひくくへきを散さはまさくてて夕つゆ八露乃種のまあらめよ
あはれもこそしかよくくまゝ行なをみすあさきくらあけらせしむくけ
櫻あてゝの種神のこゝろを中の行庭をも乃我花まよ直こけるやか

友斎

ゆくもむあらねまけきをわくしれ北一花乃風に散ることも
いかうえとたのしこそせよ桜られ世と秋の風よらうし花くは
これ月のまほえるいさきやまゆほうそしらめ哉

ちま丈夫

春の方ハ人こそいふへ古人ハ世をこそしすつきわ縁らやとけきこる名
山彦こハすてやうきまぬつんわうせハ波をききうせ秋をらけハ風とかよ
ちし世の人乃いにふてみすれさ哀四乃昭をしられ高きをまは清世
起てうつみふさひのとも
浦人のくらひ紹くる佛足ゆうひらみてすし紀文でもまそれ
おれに高きよやよつらひてまある

平春道

おしよする駿河と甲斐なる中なる富士の高ねは伊豆ハいまも古き目
こしトつゆ休むさし乃中の大河ハむかしへよりそらはしおろさハ湖の
うつる山川も古らしあれとも川ちりもたゆるよあまたなる比ほの川州
き居こそ母よ添おきらゆせ乃時風らにそかよふその山ハ名ある人
きそよかさを名年無らそいまうにまさらたしもこえうしつもとさし
くるあまにむかしへハこれ月のあゆみさも志く後乃のなてあさなる
さあくうさやき
出るまつる首を越え流るる高きのる山川うつる月をさすらんむ

八月十五夜月をみて よめる歌并短歌

橘枝直

あまの原ひくき月乃高きを望みてこゝむ大世さしの国ハ大空に

おほやけ大政を言る知事その天が下まをしたまふ人は波をあらたむと
めさしひすらにますける玉川の此方代に經るにされく桂丈わたる
西川いふむかうら紀ますに國のほとりて昔を磨き此月ころそ曳
およぶるに杦らあまもちの昔にゆりらいろはやはと磨き日なく
のらけまたわ入丈に桂川に磨きて其の源にはいきるといつさし
春されいと細えやきよさく花とつんつそ丑入杖されも環る紀おほ
此月紀めてらそかゝ人もひくしのをきらはそはるし若をく久かにわたる
きはとこまほまわかと海るかさらかくもをまつろひなひく此代のこまを

又 うた

かそめずむ江をと磨くも此月の杖乃まわれる乱のことかな
玉萩さく野代むろみをもあきれ夜ハくもちゆけども月ハかくまい

山寺ぬ杖のうた　　平 春海

まくらやせきのすみ寺の古りしろむかしをそれならぬ杖を
かきろしとをみちもよ風まさにひつくしなみあやうきひらて白楽
とものう川みなかみにを涼を乃世はくにそとくにありて法師のひくまくて
此川のもやくなりしもとくなり志のひおろくゆふしられさうし
なくもる落花乃日の夏ちよせぬむ思の人乃杖まこそつろ入れのまよ

又 哥

うまれきに杖をとらめて山寺の岩ねにおひ茂るなる

詠雪　　荻原美樹

杖ききてみしまゐ道ハ吹もも日まちたさむく降ら月とさき
とくわりゝつゝをかすか雪ハ降る寒しと凍しろに明まうちつゝき

はあるひせんとすほどにそのまじはりつゝよみ給へてむかしのあとを
ゆかし八雲の道
あはれむかしをしのぶにつけてもむかしのあとはいまもかはらじ
けふのくちにあやめて年ふる身によめる　下河辺長流
をと馬のやま山のせきもりもしられて冬の夜のかすみ八雲立つ出雲の社
のまへにまうでてもはるかにてはるかに見わたせば萩のさ原もおもかげに見えて
たゞよふやの池もおとろへひかるの露さへあれてしられぬ芦の葉の
すゑばのはかなき難波のなにはかくれぬ浦千鳥なくよもすがら
まれなるなさけもありけるかは夜すがら涌出せる暁の月のかげ
枕をとふ夜はかくなき河の流にぬるゝともわかれしものをあさ霧の
たちわたるにもなほ昔をしのぶ身のうれしき世のならひあるらむ

此かたはしのびの花の枝にてわかるゝやえだのきしはなにはふ
やうやうにつく月のかげあはれ松原ゆふきりにまどふにまよふ人の
ほとりのあけぼのあかつきの月かげしもわかるゝ人の入日ととまるよ
なんとなし

源氏の物語をよめるながうた　本居大平
あはれむかしの山のはるかなる椿の葉ひさしくて衣ひきかへ
たゞよふのうきよの女のまどはしくつゆおもふ心のみだれ
あるの源氏の君のことひとつの昔をかたりて地にかへる大かたの
をはりのよろこびもひとをいとまつる世の中の人のなかの
くらき八十あまりのうきよにかへりてよみたまふなり
まことのこゝろもあはれなる人のよきものにて人は

かれしかくはるかにめぐる文をやのをしへにてもつたへこし國乃唐の
ふみにならひしらひなしたきけるかみのくにの人そをしく
さらにあやなきせき文のこころばかりをよみかへすもへはあし引乃
やまとことのはをもてたてまつるものゝはなるゝもことの葉
めぐるにつけて言の葉のもとなるは枝にかへてあやし

荒木田久老

家のや大のあし布の浦に住あまれる老やまひにやつれてはかなき
たふらし海中にすみそをとこ倭しまよりしの緒に非さるいま
よみあまたの紙のうたし八日の律になひつされてよみ侍る
哉をひは是らのつゐをとほし小夏し海原鳴小しほの井までを
なごりしつねまつとのめでたきの浦乃やまし見えてを称へよ

よしもあしともなき言の葉も
ゆくらんたゞしの浦乃うらゝのゆかりにさそへつあはれともいへ

楠正成卿のうた　本居宣長

うらやましのあやまちは楠のうしれの命乃あからさまにもあらぬ
をおもひいでゝたゞ一すぢのまごころのみをふるひし
てつひに湊川にてみまかられしはなやかなる事はなし
てあはれ大君のためにこそとのみのこゝろをなりつ天地の
あひのこゝろいまもかはらずしてはるかなる月の照たるして
かゞやく光にかはらぬことし

ある紫集要解　去る人にかはりて奥国
よろし全きもやよろこばしきことをよろこびあへるをしめ給ふ

樫手蔭

かけまくもゆゆしかりてすま神の大御世乃ことはしめ中つ代のつくれ
八百たひかへりたまへれとも国に猶人のちからをそ大つ綱とし
ちくら神の御代ゝゝことそへたらむはすこしもあれはる人のこゝろし
なれしちらく安からむとしもなにはせる大御心を神祖乃をしへのまゝに
このわれよろこひてつかへまつる天の下申給ひしまゝに姫神のみことの
むかしの世乃こと錦国そら井に御つらさきはひ仕へまつるかしこき
しき島の道あはれよろこひのことはりのみそ高山ゆくらむことしほくて
まことにむかしよりすめら御国はことにさかえ給ふことわりにかしこき
尊ひのよしく神たから天のをしへ国は大御神の恵みしもろし
をとめくたまひたまふことにみことのり人の交もすこしもあらぬにほく

なほこのみなもとをしられしものこそ御国のや安らかなる御世にてす
大御代の千々のちふかく出つる事れ御代の千代にこそをや

このあつまりにも詩人のことは歌をよみてなにかあらん
人はみえさるをもしろく文にすれわらはともにさりしとて
昔のよしにむかしの松の葉をわかち出しかれいあらたまの
その物になるそのはしらのみなもとをいふおほつかなくは筆
ともしもみえてくはえさる人にあらすその所そす
井にもとめてよれかしこくいて抽しもとむ
あらはさむかはいて山まつら独なからしかそへてしかつ

[illegible]

高田氏用

三都發行書肆

江戸芝神明前 岡田屋嘉七

同日本橋南壹丁目 須原屋茂兵衛

同〃本橋南二丁目 山城屋佐兵衛

同中橋廣小路 西宮弥兵衛

同淺草茅町二丁目 須原屋伊八

京本能寺前 銭屋惣四郎

大坂心齋橋南壹丁目 敦賀屋九兵衛板

同 敦賀屋彦七行